

三代藏

服部應賀著

加ね  
蜜  
三  
摩

記

配

定價三匁五厘



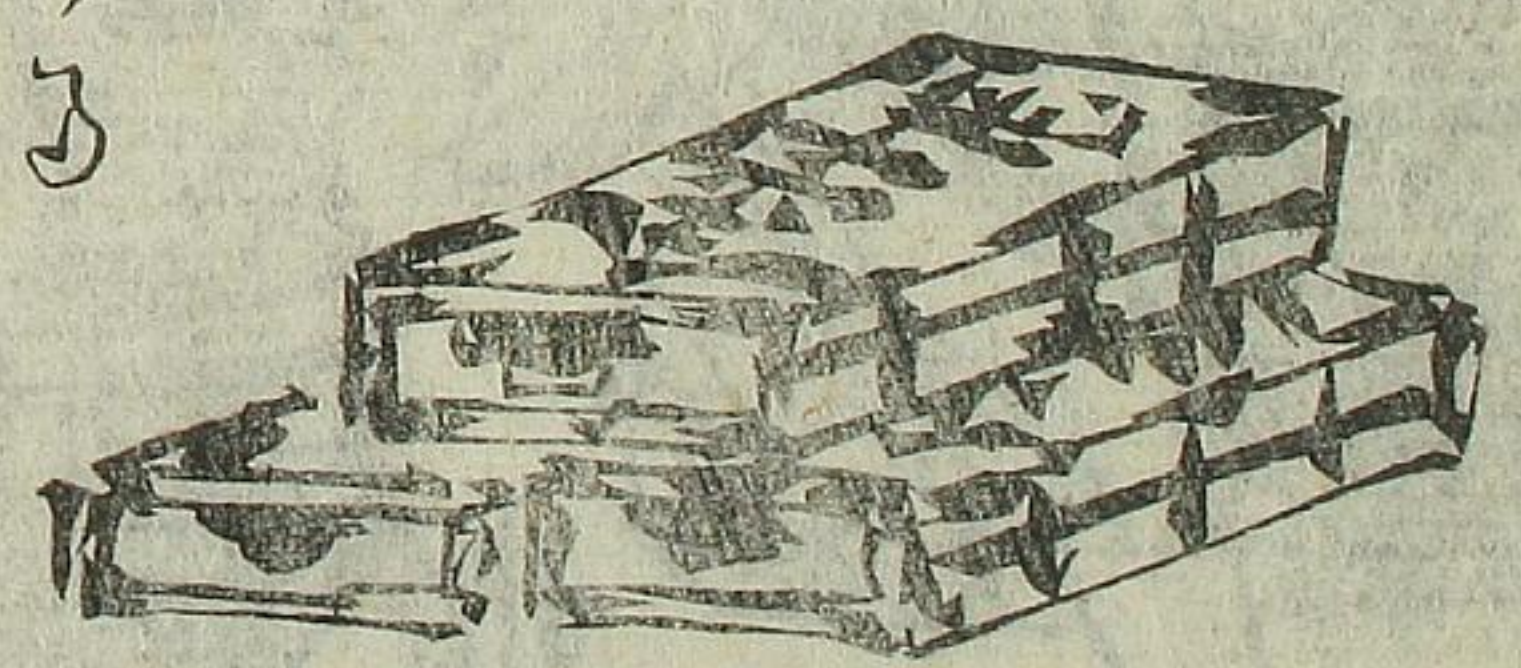
日五廿月六年七治明許官

三代目の  
石部小金次

魚を賣

家名も

毎夜



竹貫屋 三代目 石部小金次

金庫三代記

三代蔵

譬言 尿管應賀著

夫福貴それ不生まる者ハ福貴あを知しば珍膳ちんぜんも毎日まいにち喰くへばちんぜんと思おもハぬ二代目の伊勢屋金太郎いせのやかねたろうハ己おのが身骨みほねを勞ろうせぬ金由かねよしへ其得難あづかとあらねバ湯水ゆみづのやらふ費ひや一時代いっしだい我等われらハ都みやこの生うれ色いろふそやきと去さんさ形かたちふあらとと我われとらが身みの上うへをうとひて面おもて白狸しろねこの腰こしふくれ頭あたまをかしめへる者ものハありまけとも天てん

道いふておまを免さるべき其戒の人を以てるさしむ  
れば誰言初るともあく石金の金蔵より三夜はか  
けて金玉が飛ぶせむをや狐の婿入長もちのいと  
朝風の噂忽ち髪結床ふつとつり其夕方町内  
ふあつぬ者もあく弘りけむは是まど石と金の  
堅い家名が金を呼ば無利足のうへに金極進物  
とて金を預けし者もあり又安利で預けし者も  
つり此者等此噂を聞が否石部の店へ詰りけ  
番頭の忠言ふせまりて御入用の節は何時あり

と申急度返海申とある此證書と引かへし預金で  
返してくれと我がち罵らむて忠吉の憫みぐり金  
太郎の朝寝をう一間へおもむきて皆帳面ふある預  
り金ゆへ御返海けむはあつぬといへが金太郎欠  
て志るがうり譬へ帳面ふあればとて我預りし金ある  
ねが親父うり取とも見せうり返すと勝手次第ふ  
去とがよいと夜具を冠む忠吉是ふ由又うりこれ  
て夜具を搔のけん顔ふ筋てあつる親御  
うり此御身帯を譲受てとんる事いふうりば忽

此家蔵を打たて  
 一いつあこの手足せ  
 筆取々又御上へ  
 原告され時ハ連  
 由言開のどさぬ負  
 公車あるむがあち  
 の入費を六ちちで  
 出たの重荷のう  
 の小陰ゆどうあり

金を運て逃



金が溜る

金があんまりたまふてハ  
 老うがあつて後々  
 やりくめんが  
 老うのあいな金の依  
 ちらのてハくま  
 ハテ大まのこらん



昔とちがの今ハ  
 せらるるびくその人  
 ありさやゆうびんが  
 あつてたまふた  
 てもやくハたねと  
 おり人どやのちりあげ  
 さみするハ  
 こま

とも道せつけん御  
 返涙の外ハ斯  
 う時ろを地面家蔵  
 申厭るくお仲間中  
 へありと賃入を  
 されませ是もんで度  
 く御異見ゆいた  
 ちをど右う左へ  
 抜る御方ハ百度

金小眼をこま

お主人さんハ  
 金小眼のせね  
 にもハいど  
 金をえると  
 がりゆへやつ  
 めせく色

金のある木をたつと老ゆる息子

親父がいうちハかくて  
 おうういあくふと根うひき  
 ねいん志まねが  
 さがたま

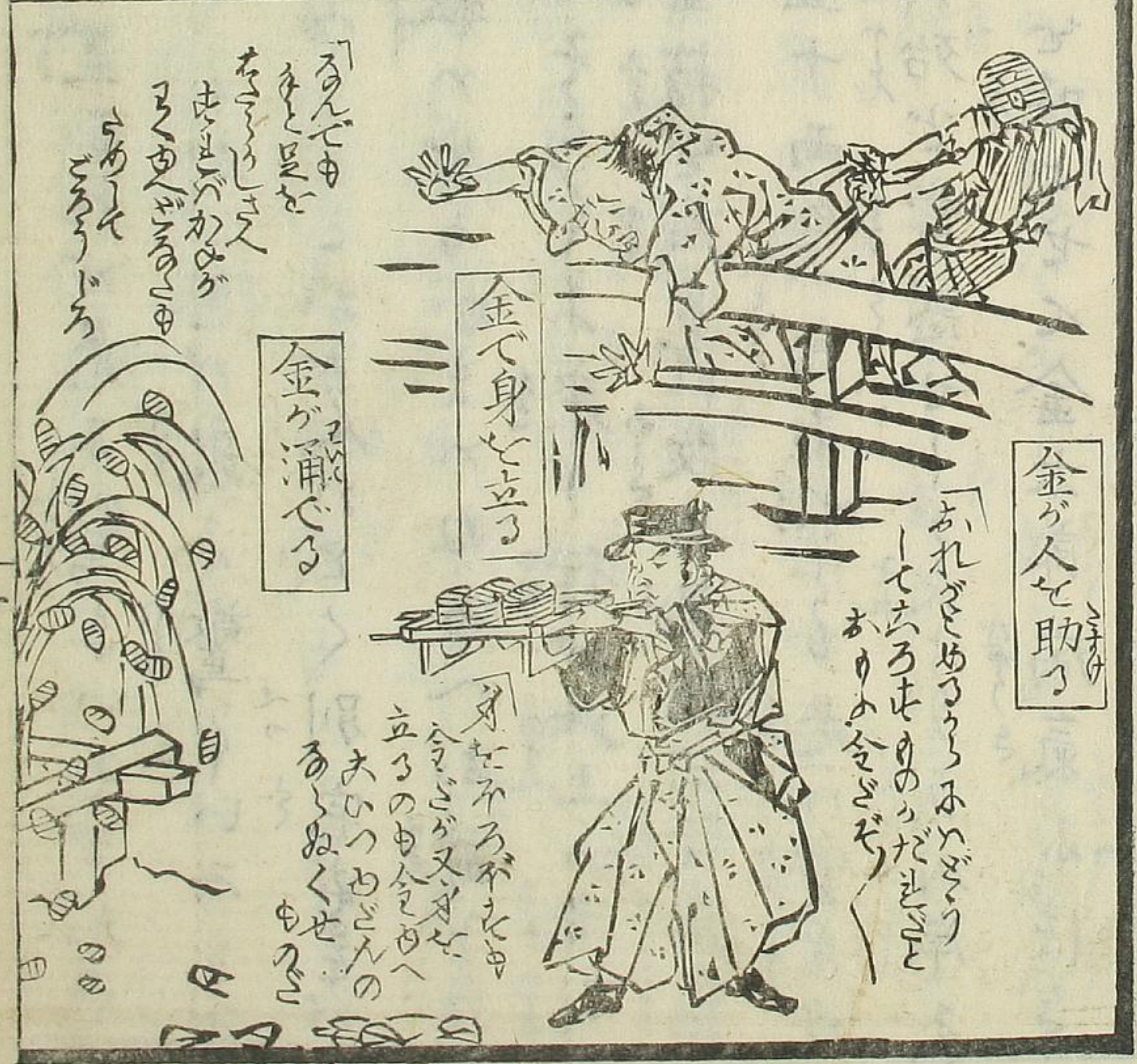
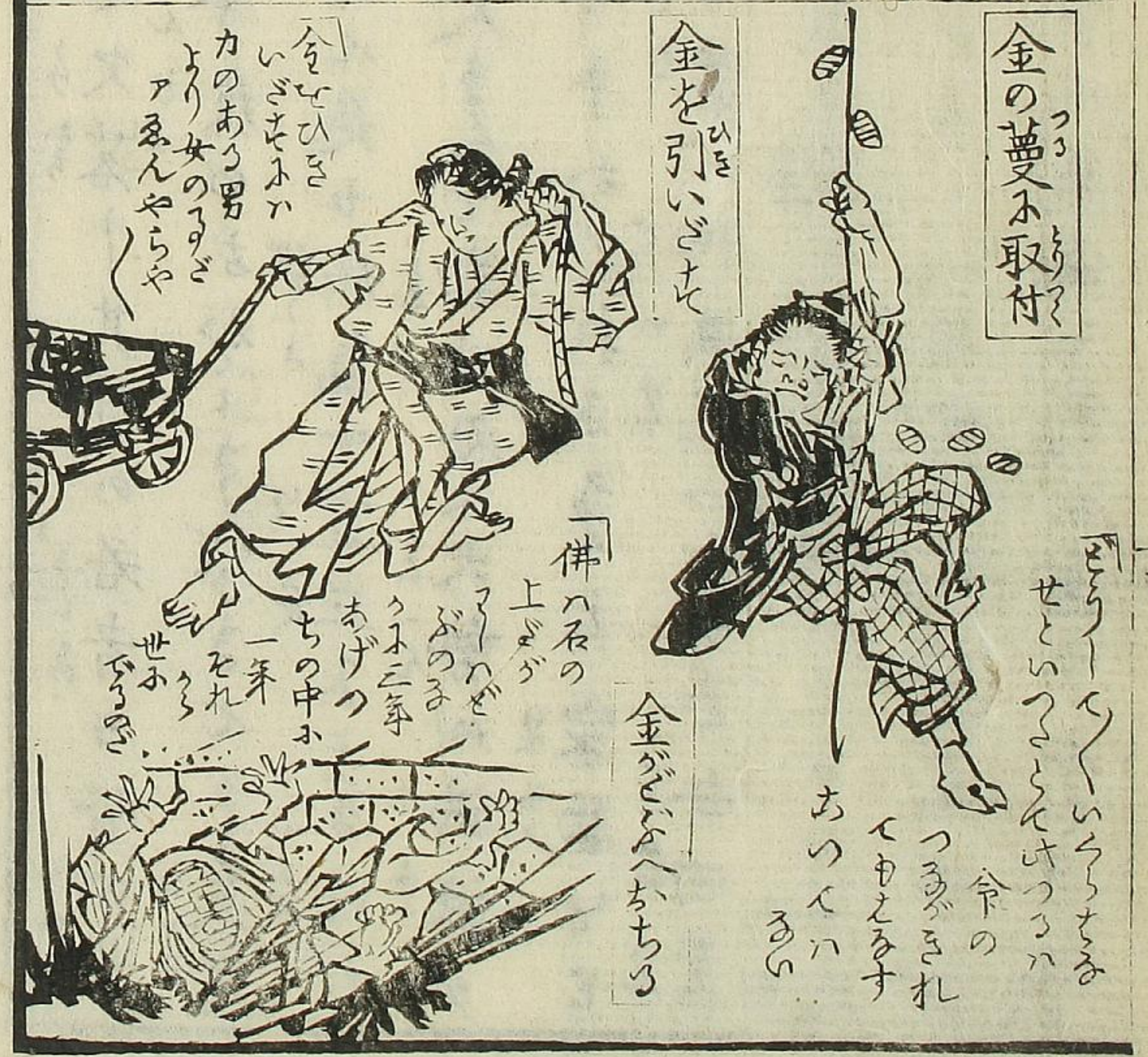


て由同一事おれども親御様の三度の食事ばり  
りの稼ひでらさう奉公人由へ味佳物をお喰せ  
されておひとり粗食物を召あがりしはあさの  
御代ふるのてい夫がひつくりかへりて商人の檢約  
才一とて惣菜もあらさまりて年中朝はとうふの糠  
味噌汁昼の数の子夕の香物あると由はあさ獨りの  
朝飯うう肴づくめのお酒盛が夜の十二字まども  
毎晩づく主の家來のとりども同ド人間おれば  
はあさ小喰ぬ物の誰ふも喰れぬが根とるのて悪

助めい大金を盗で欠落し其外の若者も皆暇哉  
とり子蔵たちの今度のおかきさんぐきてうう夫窓  
小瘤が絶ぬといつて是も病氣を言立ふも逃だ  
して私ひとり三人まんと勤る処へ大勢の洪浪が  
押よさるる堤防が手おくれあると家蔵と  
らまきまき流行言葉で御異見いさせむ発明奮  
發せるさませませ。まぐ預り金返海三日の日延  
といさくかくと苦ぐく見世へ行が金太郎寝  
耳へ水と浴せらるて夜具を引かぶり志む考

へらと見へーが枕  
元の硯をひきよせ  
て何う認終るがい  
ちや眺まどひてその  
まゝ見へば忠吉と  
漸く三日の日延を  
とつて一間へまゝ  
見れば金太郎の  
らび其坐小忠吉

殿金太郎と認る  
一封あまは是を開  
き見れば地面家  
蔵由某へ二千兩の  
書入ふるりさるを志  
ろ一我ハ申さけか  
きまゝ身を隠さる  
へ跡のそころの汝  
の了簡ふまらせよ



しくたのむとの書置かれは是に驚きいそぎおむ  
ちせよびて志うぐとかさば更し驚くいろも  
くたん事もあるうとかり人がよく別宅を  
女房でふけよば私に少もかまぬ由へお前よ  
りふるさよととそとく戻り行は此上の音引  
受んと金蔵の金箱を残り改め見れば皆空箱  
ふて中ふ元文金五十兩の一包あれども是は實用の  
金あるぬと志れど殆ど當惑せしが夫より魚川岸に  
預きし小金次を呼よせし金太郎病氣は

忤小金次家督の披露せり諸々の借財預  
り金の仕方を附し一年余りかきとどめ  
何をいふも夫度の覆ふ及て空手の一  
人二人支るカ日みけよば諸方の熟談も  
のいざる由へ是非なく地面家蔵の其引當ふ  
むけ諸道具を以て残らば其海方み充忠吉  
小金次の余金もふけよば余儀もく東京の  
場末の裏家ばかりに茲においん小金次に  
まぶらの元手を以て仕習ひさる業也へ魚

賣とさせける小金次の放埒の父母の血統  
ふよろねが賤き高賣の重頭ふの潔ぬ天稟  
あつる者もへ何卒一度家蔵の主とふつて親  
の家名を顕さんと憤発の一心より朝も疾に  
起て川岸へ行足とちうふふんを尽しける  
由へ其日の糧ふの足りけき忠吉も安心のせ  
ゆつて富士の山を造る如き望も昼夜ふたぢ  
其身の日雇ふ出けるさん小金次の垢埃  
ゆつて富士の山を造る如き望も昼夜ふたぢ

稼ごけつち或日古脊の大鯉を買ひ常小具  
員の得意へ持行ども其日ふ限つて其鯉を何  
方ふても買ねばまのなく臭いが付ける由へ  
てはまて家小持かれば末忠吉の戻らぬ  
由へ其松魚を地ふ投いごて獨言ふるさけ  
か一口惜し斯丹誠を尽すいへども聊の余銭  
ゆ残らば殊ふりみ始めて元直高き鯉を買  
又りみ限つて是を賣残せば翌日の元手ら  
更ふる六れ全く吾ふさぶつる毒魚る色は



迎<sup>むか</sup>ひ申<sup>まを</sup>す開<sup>ひら</sup>けぬ運<sup>うん</sup>と定<sup>さだ</sup>めて此<sup>こゝ</sup>腐<sup>くさ</sup>魚<sup>いし</sup>を食<sup>く</sup>はて  
死<sup>し</sup>ぬがまゝと日<sup>やま</sup>本<sup>と</sup>魂<sup>たま</sup>をたてこゝゆ乱<sup>みだ</sup>さば一心<sup>いしん</sup>覺<sup>かく</sup>  
悟<sup>と</sup>ふ輕<sup>かろ</sup>を引<sup>ひ</sup>きさげ出<sup>で</sup>又<sup>また</sup>ふて頭<sup>あたま</sup>を切<sup>き</sup>落<sup>お</sup>せげ腹<sup>はら</sup>  
より打<sup>う</sup>紐<sup>ひも</sup>のたむるを見<sup>み</sup>てその紐<sup>ひも</sup>を引<sup>ひ</sup>きさげばふ  
しぎと財<sup>さい</sup>布<sup>ふ</sup>の出<sup>い</sup>けりゆへ其中<sup>そのうち</sup>を見<sup>み</sup>まば一封<sup>いっとう</sup>の  
上<sup>かみ</sup>書<sup>が</sup>石<sup>いし</sup>部<sup>べ</sup>金<sup>かね</sup>吉<sup>きち</sup>の名<sup>な</sup>前<sup>まへ</sup>あり其<sup>その</sup>封<sup>ふう</sup>を切<sup>き</sup>ば八<sup>はち</sup>百<sup>ひゃく</sup>  
圓<sup>えん</sup>の金<sup>かね</sup>札<sup>さ</sup>あり小<sup>こ</sup>金<sup>かね</sup>次<sup>じ</sup>夢<sup>ゆめ</sup>の如<sup>ごと</sup>くふ驚<sup>おどろ</sup>き唯<sup>ただ</sup>忙<sup>いそ</sup>  
然<sup>ぜん</sup>たる處<sup>ところ</sup>へ忠<sup>ちゆう</sup>吉<sup>きち</sup>戻<sup>もど</sup>りきて希<sup>けい</sup>有<sup>ゆう</sup>の祈<sup>いのり</sup>りさまを  
問<sup>と</sup>がゆへ日<sup>ひ</sup>頃<sup>ころ</sup>の心<sup>こゝろ</sup>中<sup>なかつ</sup>よりりゆへの始<sup>はじ</sup>末<sup>まつ</sup>を語<sup>かた</sup>れば忠<sup>ちゆう</sup>

吉<sup>きち</sup>驚<sup>おどろ</sup>き其<sup>その</sup>財<sup>さい</sup>布<sup>ふ</sup>を見<sup>み</sup>て是<sup>こゝ</sup>ハ西<sup>さい</sup>國<sup>こく</sup>より御<sup>ご</sup>家<sup>け</sup>へ  
奉<sup>ほう</sup>公<sup>こう</sup>みきささる悪<sup>あく</sup>助<sup>すけ</sup>といふ者<sup>もの</sup>の品<sup>しな</sup>あり此<sup>こゝ</sup>者<sup>もの</sup>大<sup>だい</sup>金<sup>かね</sup>  
を盜<sup>ぬす</sup>りて出<sup>い</sup>奔<sup>ほん</sup>せしゆへ諸<sup>しよ</sup>方<sup>ほう</sup>をせんさくをたれ  
どもその祈<sup>いのり</sup>りゆへを忍<sup>しの</sup>びざりしゆへがさては此<sup>こゝ</sup>者<sup>もの</sup>本<sup>ほん</sup>國<sup>こく</sup>へ  
立<sup>た</sup>戻<sup>もど</sup>らんとして海<sup>うみ</sup>船<sup>ふね</sup>ふ乗<sup>のり</sup>しゆへ天<sup>てん</sup>罰<sup>ばつ</sup>のがれがと  
く終<sup>は</sup>つ小<sup>こ</sup>海<sup>うみ</sup>中<sup>なかつ</sup>ふ溺<sup>おぼ</sup>死<sup>し</sup>せしゆへ此<sup>こゝ</sup>魚<sup>うい</sup>の是<sup>こゝ</sup>れを喰<sup>く</sup>ふ  
といへども此<sup>こゝ</sup>東<sup>とう</sup>京<sup>きやう</sup>みきささるしゆへ數<sup>かず</sup>多<sup>おほ</sup>の高<sup>たか</sup>人<sup>ひと</sup>の手  
へも渡<sup>わた</sup>らば又<sup>また</sup>お得意<sup>とくい</sup>ゆ是<sup>こゝ</sup>小<sup>こ</sup>限<sup>かぎ</sup>つて求<sup>もと</sup>まざるゆへ  
全<sup>まこと</sup>く天<sup>てん</sup>より御<sup>ご</sup>身<sup>み</sup>へ授<sup>たま</sup>はるゆへありかた珍<sup>めづ</sup>事<sup>こと</sup>

明治七年六月

東京書林

濱町三丁目  
五番地

星野松藏

金庫三代記

全三冊

豚部應賀著  
猩猩々曉齋画

小学必讀  
童子問答

萩原し彦著  
吉田庸徳校

驕人必慄筐

一冊讀切

服部應賀著  
猩猩々曉齋画

010190524898

三代藏大尾

私こゝろみるまじむまじと直ただと兩人御役所へ出でていく言  
上かみしけをが金かね札し御ご戻もの上のに小こ金かね次じへの孝こ心しんの  
御ご褒ほう美び忠ちゆう吉きちへの忠ちゆう義ぎの御ご褒ほう美びああるがももへ殊  
小こよよろろ六むびびん程ほどかかく其その金かねををももつつて元もとの家いえ藏くら  
小こ立たちちももどどり三さん代だいの家いえ名なをを顯あげげて日ひづづの父ちちを  
養やひひししを代よふ稀まれあある孝こ子し小こぞぞららりりける

日	六	平	大	合	取
京	東	金	必	必	翻
書	車	車	學	入	入
林	三	三	子	必	必
	外	外	問	對	對
	時	時	答	道	道
星	野	野	吉	野	野
樓	陪	陪	田	陪	陪
林	熟	熟	膏	熟	熟
林	齊	齊	對	齊	齊
林	西	西	對	西	西

